

博士の学位論文審査結果の要旨

申請者氏名 野 口 京 子

横浜市立大学大学院医学研究科
看護学専攻 博士後期課程 感染看護学開発分野

審 査 員

主 査 横浜市立大学大学院医学研究科 勝 山 貴 美 子

副 査 横浜市立大学大学院医学研究科 有 本 梓

副 査 横浜市立大学大学院医学研究科 山 田 典 子

論文名

Feasibility study to improve oral health in older adult patients using visiting nursing services: A pilot study.

訪問看護を利用する高齢在宅療養者の口腔衛生向上のための実現可能性試験：
パイロットスタディ

本文（本文は2,000字程度）

1) 学術的な質について

本研究は、訪問看護を利用する高齢在宅療養者の口腔衛生状態を向上させるために開発した口腔ケアプログラムの実現可能性について評価することを目的とした単一群間前後比較試験である。その結果、応諾率 73.2%、完遂率 80.8%と先行研究より高く新規性、独自性が認められた。家族介護者が実施している場合の遵守率 64.3%と先行研究よりやや低い数値であるものの、家族介護者の年齢や健康状態も踏まえ十分な考察がなされていた。

本研究で用いた高齢在宅療養者の口腔衛生状態を向上させる口腔ケアプログラムは、研究期間を通じて、国内外の先行研究のレビュー、高齢在宅療養者の介護度や認知機能、家族介護者の負担や困難感に関する横断研究の実施、口腔外科医、歯科医師、歯科衛生士、訪問看護師など多職種にわたる専門職の意見を反映したデルファイ法をもとにプログラムの開発を行い、最終段階として、口腔ケアプログラムの実現可能性を単一群間前後比較試験で評価を行うなど段階的に発展させている。研究期間には Covid-19 の蔓延もあり、データ収集は困難であったと推察されるが感染看護学の専門家として高齢在宅高齢者のもとに実際に赴き、データを蓄積していくなど研究への姿勢も評価できる。研究全体を通して先行研究に基づき、実装研究を行い、確実にエビデンスを蓄積し新たな看護実践のプログラムを創出したことは高く評価される。この口腔衛生状態を向上させるケアプログラムは多くの専門職と協働して開発したものであり新規性、独自性があり、感染看護学の専門家としてさらなる発展が期待される。

2) 審査に際しての発表と質疑応答について

主要な質疑応答について下記に示す。

- ・研究デザインとして用いた前後比較試験は、症例数が少なくても評価できるメリットがある一方、比較試験ができないなど問題がありバイアスがかかる点があるが、この点をどのように配慮したか。

→博士論文はケアプログラムの実現可能性に着眼し実施したため、バイアスに十分に配慮したとはいえない。今後、対照群を設ける、RCT など、効果検証を重ねていきたい。

- ・研究 4 のセカンダリーアウトカムの訪問看護師の約半数が「資料が使用しにくい」と回答しているが、この点をどのように考えるか。

→特に介入時点の同意取得とプログラムの選定に時間を要してしまったと考えている。訪問看護師に対する効率的なプログラムの説明方法を検討する必要がある。

・臨床評価について、8項目の中で健全群の増加や病的群の減少について、解釈とその理由、また次の研究にどう生かすか。

→口腔清掃等は、口腔ケアを始めると改善しやすい項目が先行研究でも明らかになっている。スタートから1週間目は本人や家族や一生懸命やった結果が出たと考えている。次の研究では長期間継続できるようにこの結果を生かして計画したい。

・前後比較試験の限界についてベースラインの患者の情報が重要だと考えるがどう考えているか。→研究1については要介護3未満の実態調査のため、単純比較は難しいと考えていると回答がありベースラインの特性を取得するとよいとアドバイスがあった。

・調査内容全体で使用したOHATJについて、今回在宅療養者では初めての活用であったか。

→海外・日本でも使用しているツールではあるが、訪問看護の利用者に活用したのは今回が初めてである。OHATJは使用しやすいツールで口の中の清掃が分かりやすい項目であるため活用したと回答があった。OHATJを用いた調査は家族と本人両方の保健行動に繋がる重要性があると評価された。

・調査4の限界として今回は便宜的サンプリングであったことが記載されているが、今後、大規模調査に移行する際、小規模の訪問看護も含めどのように取り組む予定か。

→調査4では、3施設を使用した。うち2施設が大きな施設で1施設が小規模施設であった。当時はコロナ感染渦であり研究に理解のある大規模な訪問看護施設に協力を得たと回答があった。今後、分析で調整を行う、サンプリングの工夫などを考慮するとよいと指摘があった。

・感染看護学の専門家として、この研究の独創性・新規性・意義、またどのように発展させていくか。

→今回の研究は訪問看護・在宅療養者に焦点を当て、その特徴の家族の負担などに焦点を当て、口腔衛生状態を向上させる独創的で新規性のある口腔ケアプログラムを開発したことに意義がある。このケアプログラムは、高齢在宅療養者の特徴に合わせ、本人の口の中のアセスメントを訪問看護師、本人・家族と一緒に考えて選定した点が看護ならではの独自性であると考えている。今後、在宅療養者の感染予防だけでなく、訪問看護師の知識向上なども含めて、地域の感染予防に貢献できればと考えている。

全体として、論文に一貫性があり成果の発表は論理的かつ分かりやすいものであった。また、質疑応答では、質問内容を正確にとらえ、的確に回答できていた。

以上から、本研究は、上記したように一部の課題はあるものの、学術的意義や独創性および新規性がみられ、さらなる発展の余地は大きく、今後の看護学の発展の一助となる研究である。よって、本学看護学専攻学位審査評価基準に照らして博士（看護学）の学位を授与するに値するものと認める。